

【『琅』四十七号・あとがき】

家の周囲を歩いていて、へ来るべきものゝが迫りつつあることを象徴するような光景に遭遇した。

我が家の前を通って買い物に行く年配の夫婦がいた。いつの頃からか、その歩き方が気になっていた。夫人が夫君の手を引くようにして歩いているように見えたからだ。その後間もなくして、夫君の買い物への同行はなくなった。わが家から数十メートル先にある戸建ての家の雨戸が、しばらく開いていないことに気づいた。かつては夫婦二人で住んでいたようだが、いつの頃からか、夫君の姿が見えなくなった。最近まで、一人で買い物に行く夫人の姿を見かけていたので、長旅にでも出ているのかと思っていたが、土地が売りに出され、家を取り壊されたかと思うと、新しい家の建設が始まった。

ある日、散歩から戻ってくると、入れ違うようにして救急車が走り去って行った。隣人の話では、近くに住む、私より若干若い婦人が散歩に行った先で転倒し、救急車で搬送されたとのことだった。以前には、朝に晩に、その方の散歩する姿をよく見かけたが、救急車以来、その姿は全く見られなくなった。

こうしたことが気になるのは、まさに、他人事ではないからである。

ここ十年ほどの間に、よく転ぶようになった。二年前には、旅先で転んで車で病院に運ばれ、頸を十針ほど縫う怪我をした。職場近くの駅前で転んでズボンにダメにしたことも、家の近くのコンビニの駐車場で転んで、買ったばかりの弁当をダメにしたこともある。大事に至らなくとも、一見、平らに見えるデパートの床に、靴の裏をひっかけてよろめくことがしばしばある。

もちろん、認知的な側面での変調を感じることも多い。現役時代、職場にかかって来た仕事上の電話で、受話器を

置いたとたん、「さて、今のは中村さんだったか鈴木さんだったか？」と思うようなことが頻繁になってきた。もちろん、大事なことはメモを取るようにはしてきたが、その程度の対応では追いつかない事態も起きるようになってきた。

かかりつけの歯科医から、定期的に来診するようにと言われていたが、三回続けてドタキャンをした。もちろん、予約の日時は手帳に書いてあるのだが、肝心の手帳を開こうとしないのだ。敢えて言い訳を探せば、退職して社会とのつながりがなくなり、手帳を見て約束を確認するという行動レパトリリーが不要になったといったのである。

へ来るべきものゝとのつき合い方を考えるべき年齢にさしかかっていることは間違いない。

そうした中、最近いただいた同人雑誌「海」で取り上げられていた「一身二生」という言葉に意を強くした。一つの身で二つ人生、ということのようだ。それは、五十歳まで実業家として身をなし、五十歳を過ぎてから日本地図の作成に取り組んだ、伊能忠敬を評した言葉とのことである。定年退職を機に、現役時代とは全くつながりのないことを生活の中心に据えようと考え、実践してきた。「一つのことでも満足にできなかつた者が・・・」と言われるのは承知の上で、忠敬を真似てみたいと思っている。これが、今の私には、へ来るべきものゝとの上手なつき合い方のように思えるのである

(次号原稿締め切り日) 二〇二六年三月末日

(茂治)

『琅』四十七号 二〇二五年七月 発行
編集・発行人 松村 茂治
発行所 252-0143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-19
「琅の会」・Tel (042-777-3159・27)